



TITLE:

フロンティアと驚異 --11-13世紀イスラーム文獻におけるインドの表象を巡って--

AUTHOR(S):

稲葉, 穰

CITATION:

稲葉, 穰. フロンティアと驚異 --11-13世紀イスラーム文獻におけるインドの表象を巡って--. 東方學報 2019, 94: 482-462

ISSUE DATE:

2019-12-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/250689>

RIGHT:

フロンティアと驚異

—— 11-13 世紀イスラーム文獻におけるインドの表象を巡って ——

稲 葉 穰

I

1. フロンティアとはなにか

現在のインド共和國、パキスタン・イスラーム共和國、バングラデシュ人民共和國と、ブータン、ネパール、スリランカをあわせた領域を我々は一般に南アジアと呼び、あるいは時にインド亞大陸という名称を用いることもある（この場合スリランカは除かれる）。この領域は、おおまかに一定の文化、宗教、言語といった要素を共有し、一つの歴史世界あるいは文化世界を成してきたと考えられ、現代の地域研究などにおいても通常このような呼稱が用いられる。

この南アジア／インド世界は、地理的に言えばかつてインド亞大陸の陸塊が大陸移動によって北上し、ユーラシア陸塊に衝突、めくり上げてできあがった崑崙山脈、チベット高原、ヒマラヤ山脈、カラコルム山脈、パミール高原、ヒンドークシュ山脈といった世界の屋根をなす高い山々によってそれ以外の歴史世界／文化世界と隔てられている。このような極めて標高が高く険しい山脈群、あるいは大河、海、廣大な森林など、地理的条件、自然障壁が人やモノ、情報の移動の妨げとなり、その結果、異なる文化世界が成立してきたという考え方は極めて見やすいものである。

文化世界を区切る境界線は、歴史的にはフロンティアという用語を用いて議論されることが多い。フロンティア *frontier* という言葉そのものは、フランス語の *frontière* を語源とし、それはさらにラテン語の *frontare* に遡るとされる。Lucien Febvre によれば、フランス語の *frontière* は 13～14 世紀頃には建築用語として教會や住宅のファサードを意味するとともに、軍事用語としては敵と對峙すべく配置された最前線の部隊を意味した。その頃「境界」の意味で用いられていたのは、ラテン語由來の *finis* であったが、この言葉はやがて同じくラテン語に由來する *limites* にとってかわられることになる。一方、境界領域に敵と對峙して建設された砦や要塞化された都市は、當該政治勢力の最前線を形

成し、そこはこちら側の勢力とあちら側の勢力が接触する空間となった。そしてそれをあらわすための言葉 *frontière* は、軍の最前線だけでなく、國家や政治勢力の最前線を意味するようになったという (Febvre 1973: 208-18)。

英語においても *frontier* はそのような意味合いで用いられていたが、そこにさらなる含意がこめられるようになるのは、1893 年、Frederick Jackson Turner が餘りにも有名な論文 “The Significance of the Frontier in American History” を発表した後のことである。ターナーはこの論文において、東海岸をスタートしたアメリカの開拓運動の進展が「アメリカ」のフロンティアを西に推し進めていき、その過程の中でアメリカ的個人主義、民主主義、あるいは経済的平等や機會均等の西進が發達したのだと主張した。これはアメリカ的社會構造や制度を近代ヨーロッパ的なものの移植であるとする考えに對して、アメリカの獨自性を強く打ち出したものとしてナショナリズムに訴え、反響を呼んだ。しかし同時にこの假説は、單なる「境界」としてのフロンティアに、「文明」と「未開・野蠻」の「境界」という限定的な意味傾向を付與し、その後この言葉が未開領域への最前線という意味で歴史學や地理學以外の分野でも廣く用いられるようになる、という影響を残した (渡邊 1975: 5-28)。

2. ふたつのフロンティア

ターナーのフロンティア假説、特にフロンティアとアメリカ的價值觀の關係については、その後様々なデータに基づく反論がなされ、ターナー説は批判的に解體されていった (cf. Adelman & Aron 1999; 柳生 2015)。それでもフロンティア、境界領域の存在に様々な積極的な意味を読み出そうとするターナーの姿勢自體はその後の研究者達に大きな影響を與え、ヨーロッパ史におけるフロンティアに関する研究が活發に行われるようになっていく。ただそこで特徴的なのは、ヨーロッパにおいては特に近世、近代史が主な舞臺となったこともあり、ターナーが北米で對象にしたような、フロンティアの彼我の力關係が不均衡な、つまり「文明」と「未開」の間のフロンティアという關係よりも、「文明」と「文明」、國家と國家の間のフロンティア、境界が對象となる事例が多かったことである。Daniel Power はこの認識に立脚し、フロンティアあるいはそれに關わる研究を二つのグループ、すなわち、「北米型フロンティア」と「ヨーロッパ型フロンティア」に分類しようと試みた。前者が「文明」と「未開」の間の、後者が「文明」と「文明」の間のフロンティアに關わるスキームである (Power 1999)。

この二つのタイプのフロンティアは機能上も異なる特徴を持つとみなされている。「ヨーロッパ型」のフロンティアはこちら側とあちら側を隔て、こちら側を防衛するための境界であるが、「北米型」は外に向かって擴大し、フロンティアのあちら側にあるもの

をこちら側に取り込んでいくという境界であった。假に前者を分離型のフロンティア、後者を包攝型のフロンティアと呼ぶ¹⁾。包攝型フロンティアとはたとえば征服戦争や植民地化の際に生じるもので、アメリカ西部、アフリカ、南米などなどで観察できる。一方分離型は、上述のように近世～近代のヨーロッパにおいて観察される國家同士の間の境界線であった。Owen Lattimore は、同種の社會同士のフロンティアと、異種の社會の間のフロンティアという用語ではほぼ同じ事を表現している（前者が分離型、後者が包攝型）（Lattimore 1962: 469）。

このようなフロンティアの特徴、性質に関する指摘は、その他にもニュアンスを変えつつ種々なされているが、注意しておくべきは、これが決して異なる種類のフロンティアの存在を要求しているわけではなく、一つのフロンティアが状況に応じて包攝型にも分離型にもなりうるという可能性であろう²⁾。一方、Nicola Di Cosmo はこの点について異なる視點からアプローチし、フロンティアを、歴史的構築物としてのフロンティアと、文明のフロンティア（イメージとしてのフロンティア）という二種に分けて考えようとしている（Di Cosmo 2015: 54）。ディコスモによれば歴史的構築物としてのフロンティアとは、ある特定の時間と場所においてある勢力の間で争われ、妥協されて成立するもので、條約による境界線の設定など、基本的に独自の文脈を持つ一回性のものである、これに對してイメージとしてのフロンティアとは、中華文明とその外側、ローマ帝國の *lime* とその向こう側のように、ある境界が、實際にそれが存在していた歴史上のある時點を超えて人々の心象地理の中に具現化され、時代を超越して存続するようになったものである。中國やローマの例を取ると、長城やハドリアヌスの壁はそのようなイメージの固定化に寄與したと覺しいが、より範圍をひろげ、そのようなイメージとしてのフロンティア、あるいは文明の廣がりの範圍がなんらかの形をとっていくプロセスはどのようなものであり、何を契機とするのかというのは、優れて比較文明論の對象となりうる問いである。

1) Ladis Kristof は前者を *boundary* と呼び、それが *inner-oriented* で、*separating factor* であるとし、後者を *fronteir* として、*outer-oriented* で、*integrating* であると述べている（Kristof 1959: 271-273）。

2) ターナーが指摘したように、包攝型フロンティアを「文明」と「野蠻」の間に生じると理解するなら、「文明」の定義こそがフロンティアの有り様を規定するとも言える。ムスリムが非イスラーム世界に對して「ジハード」を行い、キリスト教徒がイベリア半島において「レコンキスタ」を行ったのも、同じ考え方によるが、そこで彼我の力關係が逆轉したり、均衡したりすると、フロンティアは今度は分離型へと變化しうる。

3. イスラームとインドの間

さて、ディコスモは古代中國を舞臺にこの點を詳しく論じたが (Di Cosmo 2004), 他の地域でも同様の視角は可能なのだろうか。本稿は、初期イスラーム時代のイランとインドの間の境界線を舞臺に、インドがイスラーム側の文獻にどのように表象されたのか、それはいかなるイメージとして結實したのかを、11 世紀から本格化し始めるムスリムの北インド進出と支配の擴大という現象と對比しつつ考えようとするものである。言うまでもなくイスラーム世界の東方フロンティアは時代とともに東に向かって擴大していったが、時々のフロンティアは歴史的出來事の歸結、構築物として成立した。小倉智史は、ムスリムのインド進出に伴い「驚異」の地であるインドとの距離が縮まり、「インドに對するイメージが不可思議な物から體系的・記述的なものへと變化し」ていったと述べている (小倉 2015: 398-400)。しかし小倉が議論の中心としたムガル朝期にそのような傾向が見て取れるとして、それに先立つ時代、特に西側のインド認識がおそらくは變化していったであろう時代については、資料の絶對的不足もあり事情が明らかにしにくい。それでも、11-13 世紀頃にイラン高原以西で著された資料を概観することによって、人々が外側からインドをどのように見續けていたのかという點についてはもう少し詳しく考えることができそうである。そこで以下、11 世紀以降に書かれたペルシア語、アラビア語の地理書、驚異譚を材料として、おそらくはどんどん増大していった筈のインドに關する實體的知識が文獻に如何に反映されたのか (あるいは反映されなかったのか) を考えてみたい。

驚異や不思議とは、言うなれば自分の良く知る世界 (日常世界) の論理で説明できないモノであり、しばしば既知の世界の外側に由來すると考えられる。その意味では驚異こそがフロンティアの向こう側に屬する、あるいは向こう側からやってくる現象なのであり、驚異の表象のあり方は、上に述べたフロンティア問題を考えるための大きなてがかりとなるはずである。

II

1. ムスリムのインド進出とインド情報

さて、まずムスリムの勢力擴大が実際に地理書や驚異譚の記述に何か影響を及ぼした可能性があるかどうかを検證してみよう。

ムスリムのインドへの進出ははやく、8 世紀初頭に行われた。海路インダス下流域 (Sind) を目指して行われたこの遠征を率いたのは Thaqif 族の若き將軍, Muḥammad b. al-Qāsim で、彼はインダス河口の商業港 Daybul, スインドの中心地であった Alor と

Brahmanābād を攻め落とし、スィンド北部の Multān のまちなみを征服した。ウマイヤ朝後期のジハード戦線の縮小により、その後ムスリム勢力はスィンドから更に拡大することはなく、逆にインダス下流域のアラブ・ムスリム支配地は四つの小さな王國に分裂し、インド史の中で何かの役割を果たしたという譯ではなかった（稲葉 2007）。

それでもスィンドの地がイスラーム世界の中に曲がりなりにも含まれたことは、9世紀半ば以降に書かれたアラビア語の地理書群に影響を与えた。そもそもスィンドとは上に述べたようにおおそインダス河下流域、あるいは Sutlej, Ravi, Chenab などの大きな川が合流してインダス本流となるあたりよりも下流の地を指す名稱で、それ以外のインド大陸の地は Hind と總稱されていた。しかし初期の地理書群においては、スィンドの記述が分厚く、ヒンドについてはそれに比して情報が乏しい。たとえば最も古い記述である Ibn Khurdādhbih の地理書を見ると、インダス川下流域に限られるスィンド地域に關して 28 のまちの名を挙げる（Ibn Khurdādhbih: 56-7）のに比して、それ以外のインド大陸をさすヒンドについては、良く知られたまちとして五つの名を挙げるのみである（Ibn Khurdādhbih: 68）。イブン・ホルダーズビフの地理書はいわゆるアッバース朝行政地理のハンドブック的な性格を持っているため、これは、征服後のアラブ・ムスリム社會を通じてもたらされた情報がアッバース朝のもとで集積されたことをある程度反映しているのだろう³⁾。さらに、ムスリムによるスィンド征服は領土擴大という意味だけでなく、ペルシア灣からアラビア海、インド洋西岸部における海上交易の安定と活發化をもたらしたと覺しいが（稲葉 1999）、Kambāya（現 Cambay）、Ṣaymūr（現 Chaur）、Kūlam Malay（現 Quilon）などの海港都市についての記述が比較的豊かに見られるのも、このムスリムのスィンド征服の影響と見なして良いだろう。さらに9世紀、Rāmhurmuz 出身の船乗り Buzurg b. Shahrīyār によって蒐集された情報をまとめた『インドの驚異譚 *ʿAjāʾib al-Hind*』などの資料も、この、海上交易の活發化と情報の集積の現れである（家島 2011: 11-15）。

ムスリム勢力のインド大陸への進出はその後、それほど華々しい成果をあげることはなく、10世紀頃まではインダス下流域におおそ限定されていた様である⁴⁾。状況が大

3) 10世紀半ばの Iṣṭakhri の地理書では、スィンド地方として、そこに屬するまちまちの具體的な様子や、都市間の道のりなどが詳しく述べられている（Iṣṭakhri: 170-180）のに比して、ヒンドにはまとまった項目が立てられていない。Ibn Hawqal も、スィンドについて詳細に述べる（Ibn Hawqal: 217-230）が、ヒンドはその向こう側の地として觸れられるのみである。Muqaddasī も同様にスィンドは詳しい（Muqaddasī: 474-486）が、ヒンドの項はない。

4) ただし、パキスタンの Tochi 溪谷で發見されたとされるアラビア語、サンスクリット語、バクトリア語の併記碑文は、9世紀の時點でインダス中流域右岸にアラビア語の名前を持

大きく変化するのは10世紀終わりに東部アフガニスタンにガズナ朝が成立して後である。初代 Sebüktegin が北西インドおよびインダス下流域への足がかりとなる Peshāwar, Kuṣḍār (現 Khuddār) を屈服させたことを承け、彼の息子 Maḥmūd は30余年の治世の中で20回近いインド遠征を敢行し、カティアワール半島の Somnāth や、チャンデッラ朝の都 Kālinjar など屈服させ、その後ゴール朝の征服を経てムスリムの北インド支配の道を開いた(稲葉2019)。

2. 9～11世紀の變化

この状況がどれくらいムスリム側の地理情報に反映したのかについては、Noémie Verdon の詳細な議論が意を盡くしている (Verdon 2015)。ヴェルドンはとくに Abū Rayḥān al-Bīrūnī の『インド誌 *Tahqīq mā' lil-Hind*』を題材としてとりあげ、そこに見えるヒンドの地理情報が、当時の政治軍事状況とどう関連するかを論じている。ビールニーは言うまでもなくイスラーム世界を代表する大學者で、『インド誌』以外にも多くの重要な著作によって後世に知られているが、とくにガズナ朝が開いた北西インドへの道を用いて、現地においてフィールドワークを行い、言葉を學び、インド思想を研究したことが際立った特徴である。ヴェルドンによれば、10世紀以前、南アジア世界の西の端にあたるスィンド、すなわちインダス下流域からアラビア海沿岸の都市がイスラーム地理書の主なトピックであったのと異なり、ビールニーはインドの地理を、Kanawj を中心に述べている。それまでの主役であったスィンドはほとんど言及されない。カナウジを中心に東西あるいは南西、北へと延びる道の記述はまさにビールニーが仕えたガズナ朝のマフムードの北インド遠征経路に合致するという。要するにガズナ朝の政治軍事的擴大が、西にもたらされる地理情報、とくに地勢に関するそれを増大させ、大學者ビールニーはそれを用いて記述を行ったのであり、その結果、政治軍事の面のみならず、知識面においてもイスラーム世界のフロンティアは実際に東へと進んだのであった。

ヴェルドンは、このようにそれまでの地理書の記述の主役がスィンドから、11世紀以降にヒンドへと移っていくことを指摘しているが、一方で10世紀にアフガニスタンにおいて無名著者が記したペルシア語地理書『世界の疆域 *Hudūd al-'Ālam*』が Hindustān という項目をたてて、スィンドとヒンドをあわせて記述している (*Hudūd*: 63-73; Minorsky 1970: 86-92, 235-254) こと⁵⁾を勘案するなら、この點はガズナ朝以前から徐々に顕在化して

つ總督がいたことをうかがわせる。Cf. Sims-Williams & de Blois 2018: 30-32, 92-97.

5) これに関しては、*Hudūd al-'Ālam* が書かれた地理的政治的環境(現在のアフガニスタン)

いた特徴なのかも知れない。ちなみに『世界の疆域』は、Alptegin の東部アフガニスタン征服により、Kabul や Ghazni がそれまでインドであったのが、イスラーム世界に編入されたと記している (*Hudūd*: 140; Minorsky 1970: 111)。ちなみにイブン・ホルダーズビフや Qudāma b. Ja'far は東部アフガニスタンをインドに隣接するとしつつもインドに含めていないが (Ibn Khurdādhbih: 38; Qudāma: 243)、これは 8 世紀末から 9 世紀前半にかけてのアッバース朝の攻勢により、カーブルシャーの勢力が一時弱まっていたことを反映するのかも知れない (cf. 稲葉 2013)。10 世紀に *Hudūd al-ʿĀlam* や Ibn Hawqal (450) がこの地域をインドに含めて記述したのは、その後の同地域におけるヒンドゥーシャー朝のブレゼンスの大きさとも關わるのだろう⁶⁾。この点についてまた後段で述べる。

ムスリムの北インド進出はその後も着々と進行した。とりわけ 1040 年にガズナ朝がセルジューク朝に敗れて西方領土を失い、徐々にその國家の重心を北西インド、Punjab 方面へと遷していったのにつれ、ムスリムの足跡もだんだんと広い範囲へとおよんでいった⁷⁾。12 世紀半ば、遊牧集團 Oghuz に追われてガズニから Lahore へと都を選していたガズナ朝は、アフガニスタン中央部の山嶽地帯より現れたゴール朝によって滅ぼされてしまう (Bosworth 1977)。ゴール朝の北インド作戦の実働部隊となった、Qutb al-Dīn Aybeg, Tāj al-Dīn Yuldiz, Nāṣir al-Dīn Qubācha ら、Mu'izz al-Dīn Muḥammad Ghūrī の軍事奴隷出身の將軍達は、ムイッズ・アッディーンがゴールの地で 1206 年に死去した後、北インドで自立し、デリーに據點をおいたアイベグの後繼者たちがやがて北インドを統一することとなる。

先に述べたようなプロセスを参照すれば、この時期インドに關する知識はさらに増え、南アジアで書かれた文獻のみならず、イラン高原以西で書かれる地理書にも前代よりさらに多量で、かつ正確な情報が載せられそうなものであるが、事はどうもそう単純なものではなかったようだ。残念ながら、我々は現在ムガル朝以前に北インドで書かれた地理的文獻をほとんど有していない。また下に詳しく述べるように、かつての地理書的文獻はイラン高原以西においても數を減らし、その代わりに地理書の派生形とも言える驚

北西部において 10 世紀後半に書かれた) が微妙に關係している可能性がある。

6) Kāpīsi/Kabul に都を置き、カーブル川沿いに Gandhara 方面までを支配した王朝はクシャーン朝以後複數現れる。とくに 7 世紀後半、カーブルに據點を置いてムスリムの進行を食い止めたのは Kābulshāh と呼ばれる勢力で、當初この王國の王家は Khalaj Türk であった。9 世紀前半、ヒンドゥー系の王家がこれにとってかわり、以後 11 世紀初頭にガズナ朝のマフムードに滅ぼされるまで、カーブルと Wayhind (現 Hund) を兩都として北西インドを支配した。Rahman 1979 参照。

7) パキスタン北部 Swat の Udegram には現存する北インド最古のモスクの址 (1048-49 年の紀年を持つ碑文あり) が發掘されている。Cf. Bagnera 2015.

異譚文學がいくつか書かれるようになる。次章では11世紀から13世紀にイラン高原以西において書かれた文獻を参照しつつ、実際にムスリムが統治するようになって以降のヒンド、あるいは北インドは、西側の者達にはどのように認識されていたのか、という點を考えてみたい。

III

1. 11～13世紀の地理書、驚異譚

André Miquelによれば、もともと初期のアラビア語、ペルシア語地理書は、各地の状況を述べる中で、各地にある驚異的な建築物や不思議な現象について記載していた(Miquel 1988: 95)。それは前イスラーム時代の遺跡、遺物として各地に残るモニュメントを説明するためのカテゴリーであったのだが、これらはやがて「驚異 'aja'ib」と呼ばれるようになり、12世紀頃からはこれについてもっぱらに記す文獻が登場し始める。自分たちが日常として知る世界の中に生じる驚くべき出来事、モニュメント、あるいは不思議な経験を、既知の世界の外側に由来する何ものかに假託して説明するということは、洋の東西を問わず古來行われてきたと考えられる⁸⁾。キリスト教やイスラーム教の文脈の中では、もちろんそのような通常では説明不能な事柄も、神の全能と、人間には不可知の意圖の顯れであると理解され、奇跡や驚異は世界を構成する重要な要素とされてきた(Zadeh 2011: 4; 山中 2015: 9-10)。

いま試みに、よりインドに近い地域であらわされたペルシア語文獻を例に取ってみよう。年代がわかっている中で最も古いものの一つは12世紀後半(1170年代以降)に書かれたMuḥammad b. Maḥmūd al-Ṭūsīの『被造物の驚異と萬物の珍奇 'Aja'ib al-Makhlūqāt wa Gharā'ib al-Mawjūdāt』である。本書については守川知子らによる邦語譯注が發表されており⁹⁾、著作事情や作者についても詳しく紹介されているが、それによるなら同書はセルジューク朝の最後の君主Tughril 3世(位571-590/1175-94年)に獻呈すべく著された百科全書的書物である。天體、天地の間、大地、水、海に生じる驚異、諸都市で見られる驚異、樹木、墓廟、人間、精靈、鳥、動物に見える驚異という形で、人の住む世界に關わる様々な驚くべきことがらが描寫されている(守川他 2009-18: i, 198-9)。

8) たとえばダグラス 2009: 第六章参照。

9) 全11部にわたる勞作で、「ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースィー著『被造物の驚異と萬物の珍奇』」というタイトルで、『イスラーム世界研究』2巻2號(2009年)から同11巻(2018年)まで連載された。

著者であるトゥースイーがどのような人物であったかは残念ながらよくわからない¹⁰⁾。

それから半世紀ほど遅れた 1220 年代、作者不詳の『世界の驚異 ‘*Ajā'ib al-Dunyā*』という書物が著されている¹¹⁾。テキストと翻譯を出版したЛ. П. Смирноваによれば、本書はカスピ海の西側、アゼルバイジャン地方で書かれたらしいが、内容的には上述の『被造物の驚異』とかなりの部分、共通する（‘*Ajā'ib al-Dunyā*: 24）。著者は、中東をかなり廣範に旅した人物であったようだが、インドを訪れたという形跡はない。

一方、『被造物の驚異』と『世界の驚異』の間、おそらくは 1203 年頃に Muḥammad Najīb Bakrān があらわした『世界の書 *Jahān nāma*』は、傳統的地理書の體裁をとりつつ、多くの驚異譚を掲載している。ナジーブ・バクラーンは序言において同書を、「地上の、人の住む地域の姿、諸地方やまちまち、海、大河、山、荒野その他の有り様」に関する情報を説明し、理解されるように書いた、と述べているが（Najīb Bakrān: 3）、これは古典アラビア語地理書（10 世紀末までに著されたもの）によく見られる口上である。しかし全體の構成としては、世界の形、海、湖、島、川、山、荒野、まち、人々、驚異、寶石、産物、アラブ、といった主題で章をわけて記しており、その構造はトゥースイーの『被造物の驚異』に通じるものがある。その意味で、同書は古典的地理書と驚異譚文學の間を架橋するような性格のものと言ってよいかも知れない¹²⁾。

以上の書物を題材に、まずは 12-13 世紀にインドがどのように表象されていたのか、確認してみよう。

2. インドの地誌

さて、10 世紀以前の古典的地理書において、インド（あるいはスインド）の記述は以下のような形態をおおよそとっていた：

1. 地域の概略の記述、氣候など
2. 山や川の記述
3. 代表的な都市の記述

10) トゥースイーの情報源となった書物として、守川他は Ṭabarī の年代記, Ibn al-Muqaffa', Ibn Fadlān の旅行記, Abū Dulaf の旅行記, 『中國とインドの諸情報』, 『インドの驚異譚』といった書物をあげる（守川他 2009-18: i, 201-202）。

11) 従来は同書の著者は Abū al-Mu'ayyad al-Balkhī と見なされてきたが、校訂者スミルノワは Н. Д. Миклухо-Маклай の研究（1955）に基づき、バルヒーが著者であるとは見ていない（‘*Ajā'ib al-Dunyā*: 22-26）。

12) 守川他は、ナジーブ・バクラーンがトゥースイーの影響を受けたと見ている（守川他 2009-18: i, 199）

4. 地域内の、あるいは地域外の諸都市間の距離について¹³⁾

これに對して、上にあげた三つの文獻にはそのような構造は見られない。『被造物の驚異』や『世界の驚異』については當然かもしれないが、地理書の装いを持つ『世界の書』においても同様であるのは興味深い。

それでも『被造物の驚異』においては第三章に「諸都市や諸地域について」と題して、アルファベット順に地名を排列して都市や地域の特徴を記している部分があり、そこには「Jājālī」(守川他 2009-18: v, 402), 「Sarandīb」(ibid., 426), 「Sarīra (シュリーヴィジャヤ)」(ibid., 429), 「Sū (ソムナート)」(ibid., 435), 「Qamār」(ibid., 452), 「カーブル」(ibid., 456), 「クーラム」(ibid., 456), 「ラホール」(ibid., 458), 「ムルターン」「Maṣūra」(ibid., 466), といったヒンド、スィンドのまちまち、および「ヒンド」(ibid., 474) 自體についての記述がある。たとえばそれぞれのまちの名前の後には、そのまちの特徴や特産品が記載されている。また最後のヒンドの記述では、そこに屬するまちまちの名前が列擧されている(本文中で現れないものも含めて)が、これらは上述の古典地理書の形式をある程度踏襲した記述方法であると見ることもできる。

『世界の驚異』でも同様に、まちの名前をあげてその描寫を行うという形式がとられている箇所がある。たとえばKLBA はヒンドにあるされ(‘*Ajā’ib al-Dunyā*: 338), 名稱未詳の偶像神殿を祀るまち(ibid., 350), サリーラのまち(ibid., 403), Suqūtrā (ibid., 511), Sandān (ibid., 511), Sūbāra (ibid., 511), クーラム (ibid., 525), ラホール (ibid., 527), ムルターン (ibid., 530) といったまちまちの名が擧げられる(ただし、それぞれの説明では「不思議話」「過去の出來事」「頓知」などといった面が強調されている)。またヒンドゥースターンの項では、豊かな様子、人々の性質、數學に秀でている様子、人々の慣習などとともにこの地域の特産物の記述がある¹⁴⁾。

3. インドの不思議

一方、具體的な地理情報ではなく、不思議なできごと、産物、觀光名所、自然現象などなどについて、當然のことながら驚異譚文學は豊富に記している。初期のイスラーム世界、とくにその東方においてこのような不思議、驚異とよく結びつけられていたのがインドの地であることは、先に名前を擧げた『インドの驚異譚』と呼ばれるテキストに

13) イブン・ホルダーズビフに始まる『諸道と諸國の書』系の書物の特徴の一つである (cf. Maqbul Ahmad 1963: 579)

14) 興味深いことに『世界の書』には、ヒンド／ヒンドゥースターンに関して組織的な記述がない。

端的に示されている。家島が指摘するように同書の冒頭には

「さて、そもそもアッラー —— その御名は讃えられ、その讃美は犯し難きものなり —— こそは、[地球上のあらゆる] 驚異を一〇部に分けて創造なされ、そのうちの九つ [の部] を、[地球の四つの隅のうちの] 東の隅に、[残りの] 一つ [の部] を地球の三つの隅に置かれたのである。それ [の三つの隅と] は、すなわち西、北と南のこと。さらにアッラーは東の隅にある九つ [の部] の [驚異の] うちの八つの部を中國とインドに、そして残りの一つを東 [の隅] に配置された。」[家島 2011: 34]。

とある。インドがいかに驚異に満ちた地と考えられていたのか明らかであろう。前述のように、同書は8世紀後半から10世紀にかけて盛んとなったインド洋を経由する海上東西交易の活発な活動を反映したものであるが、同時に、インド亞大陸内におけるムスリムコミュニティの成立によってそれまで以上に接触が増えたインドが、東方イスラムイスラーム世界にとって最も近い異界となっていたという状況を示すものでもある。

このような環境のもと、最初に検討した古典的アラビア語地理書の中でも、インドが自分たちの世界とは異なる場所であるかを述べるものがいくつか見られる。最も有名なものはイブン・ホルダーズビフの以下のような記述であろう：

「インドの王達と民は姦通を赦すが、飲酒は認めない。ただ Qimār の王のみは姦通も飲酒も禁じ、サランディーブの王はイラクから酒を運ばせそれを呑む。」(Ibn Khurdādhbih: 66-67)

さらに、同書はインドにおける身分制度、婚姻の制限や生業の別についても述べている：

「Shakthariya は最も高貴な者であり、彼らの中から王があらわれ、全ての種類の者達は彼に平伏するが、彼らは誰にも平伏しない。Brāhima は酒やワインを飲まない。Ksatriya は杯三杯のみ酒を飲む。ブラフマンは彼らと通婚せず、彼ら自身の間で通婚する。Shūdariya は耕作し、Bayshīya は手工藝を行う。Sandāliya は演藝を行い、音楽を奏でる。彼らの女性美しい。Dunbiya は肌が黒く、演藝を行い、弦楽器を奏で、滑稽な芝居をする。」(p. ibid. 71)

ここではイブン・ホルダーズビフの得た情報が淡々と語られ、著者自身はそこに介在していない。11世紀のビールーニーの記述はやや異なり、なぜムスリムとインド人が違うのかという点を自身の経験を交えて考察しようとしている：

[インド人とムスリムが相互に理解しがたい理由として] また次のことがある。彼らは信仰において我々と全くと言っていいほど異なる。我々は彼らの信仰を全く認めないし、彼らも我々のそれを認めない。彼ら同士の間で信仰についての争いがあることは少ないが、[あったとしても] それは議論や論争のようなものにとどまり、命

や體や財貨を危険にさらして争うことはない。そういうやり方〔での争い〕は彼らに對立する者（＝非インド人）に悪意をもって向けられるのだ。そのような者達は *mulij* と呼ばれるが、それは不純な者であり、婚姻や友誼でそれらと接觸したり、同席したり飲食をともにすることは認められない。それは汚れだからである。彼らは、人の暮らしがそれによって成り立っているところの水や火についても、そのような人々のものは不純であると認定する。そして、汚れたものが清浄な状態のものと一緒にあることで綺麗になっていく、というような手段をもってそれを正すことも望まない。〔つまり〕彼らは彼らに屬さない者を、たとえその者が彼らの中に入ることを欲したり、彼らの信仰に傾倒したりしても、絶対に受け入れようとしないのである。このことが、〔ムスリムとインド人の間の〕全ての接觸を不可能とし、溝をより大きくする原因となっているのである。

また、以下のような事情もある。我々と彼らのしきたりや慣習は全く異なる。〔それゆえ〕彼らは我々の存在や、我々の服装、外見を、子供達を怖がらせるのに使ったり、はては我々を正義の對極にあるところの悪魔に結びつけたりするほどなのだ。しかし、このような我々に對する非難が〔インドにおいて〕一般的であるとしても、それは我々とインド人の間だけにあるのではなく、どこの國でもよく見られることでもあるのだ。』（Bīrūnī: 18-19.）

一方、前節で挙げた三書を見ると、インドの地は特に「不思議」と結びつけられている。たとえばヒンド/ヒンドゥースターンという地名が登場する頻度を数えてみるなら、『被造物の驚異』の中では264回を数え、中國（Chin）の176回やテュルクの100回大きくを上回る。ちなみに『世界の驚異』ではインド（Hind/Hindūstān）は19回、トルキスタンが14回、中國はわずかに2回しかあらわれない。『世界の書』ではインド（Hind/Hindūstān）が36回、中國が33回、トルキスタンが6回言及される。『インドの驚異譚』の著者は、神が驚異の多くの部分をインドと中國に置いた、と書いたが、その中でもインドの割合が高そうである。また『世界の書』では、インドと中國の差があまりないのは、驚異への言及の總数が多いほどインドがより多く言及されるということの意味するのかも知れないが、これについてはサンプルがあまりに限られているので、断定はできない。

4. 新しい情報

さて、前掲の三書が著された12世紀後半から13世紀前半、ムスリムはついにデリーに王權を樹立し、一方イスラーム世界東方はモンゴルの大征服の強い影響を受けつつあった。このような政治状況、あるいは北インド征服によって得られた新たな情報がそ

これらの驚異譚文學に取り込まれているのかどうかは判然とはしない。少なくともモンゴルの征服によって起きた事件についての直接的言及はない。ただこの點を間接的にさぐるための一つの手がかりは、それぞれの文獻で、インドがどこから始まるとされているか、つまりイラン世界とインド世界のフロンティアが那邊にあると考えられていたのか、の比較である。

ムスリムが現在のアフガニスタンや北西インドに到達する前の状況を示す資料として、7世紀前半、玄奘三藏はインド世界が今のカーブルの東、Lamghānの地から始まると述べた（桑山 1987: 31-2, 180-1）。前述のように、9世紀イブン・ホルダーズビフはアフガニスタン東部、カーブル近邊をインドに隣接するとしつつ、インドには含めなかったが、10世紀のイブン・ハウカルはガズニのまちについて、アルプテギンの征服により状況が変わったとは言え、この地はインドだった、と述べ、ほぼ同じ頃『世界の疆域』もやはりガズナ朝の出現により、東部アフガニスタンはインドではなくなったとしている（稻葉 1994: 229-30）。ここでいうインドが、地理的概念と政治的文化的概念の混淆物であるとしても、イスラーム時代初期、その二つの概念の間にはそれほど大きな齟齬はなかったであろう。ところが、その後、ガズナ朝やゴール朝の治世を経てムスリムの支配地域は現在のパキスタン北部からインド北西部へと擴大していったにもかかわらず、『被造物の驚異』、『世界の驚異』、あるいは『世界の書』においては、たとえばカーブルがインドに位置していたり、ガズニがインドとの境界線にあると記載されている。ここにおいては、地理的概念としてのインドと政治的文化的概念としてのインドが乖離し、しかもその區別があまりつけられずに用いられているように見える。

その一方で、新しく付け加えられた情報も見られる。『被造物の驚異』はラホールについて

「ラホールはヒンドゥスターンの境域にある町である。他の町々とともにムスリムが支配している。ガズナまでは160ファルサングである。ラホールは壮大な町で、ヒンドゥスターンの樞軸である。」（守川他 2009-18: v, 458）

と記し、またソムナートについても、ガズナ朝のマフムードによる同地への遠征の話（1024-25年）、同地の神殿に置かれていた偶像は、前イスラーム時代にカアバに置かれていたマナート女神の像で、カアバの偶像が破壊されたときに逃れてカティアワール半島に運ばれたものだという有名な逸話、マフムードが同地から持ち歸った偶像をガズニのマドラサの敷居に埋めて人々に踏ませた話などが記されている（ibid. 435）。これらは明らかに11世紀ガズナ朝時代に起きた出来事を反映した記述である。さらに、これらの作品におけるBāmiyān佛教遺跡に関する記述を見てみると、石窟の壁畫であるとか、大佛の龕の内側に造作された上部へ続くトンネルであるとか、11世紀以前に資料には見られな

い、より詳細で具体的な情報が記載されていることがわかる (Inaba 2019)。

結局、驚異譚文學も、まったく情報をアップデートしていないわけではなく、それまでの資料に見られない要素を盛り込みもしているのであり、結果として同時代に近いリアルな情報と、そうでないものとがこれらの文獻の中に混在することになった¹⁵⁾。

IV

1. カズウィーニー

確かに『被造物の驚異』や『世界の不思議』(あるいは『世界の書』)などについては著作年代と、ムスリムの本格的北インド支配の開始がほぼ重なっていて、新しい知見を反映する時間がもしかして著者達にはなかったのかもしれない。ではその後の著作についてはどうだろうか？

おそらくイスラーム文學史上最も良く知られる驚異譚作品は Zakaryā Qazwīnī の『被造物の驚異と萬物の珍奇 *‘Ajā’ib al-Makhlūqāt wa Gharā’ib al-Mawjūdāt*』(トゥースイーの作品と同一タイトル)であろう。この書物が書かれたのは『世界の驚異』から遅れること半世紀以上、おそらくはモンゴル支配下の Baghdād においてであった(この作品は彼のパトロンで、1262 年以降フレグ・ハーンのもとでバグダード總督を務めていた ‘Alā al-Dīn Atā Malik Juwaynī に捧げられている)。この世界を成り立たせている諸要素について様々な面から論じるこの書は、イスラーム文學における最初の體系的宇宙論であると評されている。しかしここで取り上げたいのは、ほぼ同時にカズウィーニーが著したアラビア語地理書『諸國の遺跡と民の歴史 *Āthār al-Bilād wa Akhbār al-‘Ibād*』の方である。宇宙論と補完的性格にあるとされる同書は、いわゆる古典地理書の體裁を踏襲し、それぞれの氣候帯とそれに屬する地域、都市について簡潔に記して、多くの讀者を獲得したとされる (Bosworth 1987)。さらに本書は一度『諸國の驚異』という名前で完成した後、さらに加筆修正されて現在の形になったのであるが、第一版の名前に見えるように、やはりこの世界に見える驚異について語ってもいるのであり、宇宙論的な『被造物の驚異』に比べ、前節にあげたようなペルシア語の先達により近い形式を持っている。

2. 『諸國の遺跡』に見えるインド

『諸國の遺跡』には、トゥースイーの『被造物の驚異』などと同じように、地域の説明、

15) ちなみに、更新される情報とそうでないものとの間に有意な違いがあったのかどうか、今の時点では残念ながら筆者にはわからない。

そこに属する都市の説明、関連する逸話などなどの記述がなされている、いわゆる古典的地誌 (chorography) の部分と、いろんなところで見出される驚異や不思議に関する部分の両方の記述がある。前者において、インド (スィンドを含む) の地名としてあげられているのは以下の通り : Arām (*Āthār al-Bilād*: 77), Jājālī (ibid., 80), ソムナート (ibid., 95-6), Ṣanf¹⁶⁾, サイムール (ibid., 97), Fayṣūr, クズダール, Qishmūr (<Kashmir) (ibid., 104), Qumār¹⁷⁾, Kalbā, Kalh, クーラム (ibid., 103-7), ムルターン, Malibār (= Malabār?), マンスーラ (ibid., 121-125), Nudha (ibid., 127)。これらの地名のうち、13 世紀以前の資料には言及されないのが、たとえば Fayṣūr や Malibar, Nudha あたりで、これらの記述の付加ももしかしたら情報量の増加を反映しているのかも知れない。ただにより特徴的なのは、インドの都市の記述の多くの箇所 Mis'ar b. al-Muhalhil が情報源として用いられているという点である。Abū Dulaf というクンヤによってより良く知られているこの人物は、10 世紀に活躍した文人で、『歌の書 *Kitāb al-Aghānī*』にも名前が言及される當時を代表する文化人だった。プワイフ朝の高名な宰相 Ṣāhib b. al-'Abbād のサロンで活躍したと覺しく、自らの旅行記を二つの書簡として残したことで知られている (cf. Bosworth 1976: i, 48-96)。この書簡は、Zeki Velidi Togan が発見したいわゆる『Mashhad 寫本』に含まれており、イラン高原西部を旅した記録とみられる第二書簡については Vladimir Minorsky がテキストと英譯および注を公刊している (Minorsky 1955)。それなりに現実的な状況を反映していると見られる第二書簡に對し、中國皇帝からのプハラへの使節の歸途に同行して中國へ赴き、それから東南アジア、インドを経て、アフガニスタン、イランへ戻ったとする第一書簡の方は、おそらくはプハラ邊りで集めた情報をもとに机上で組み立てた話とみなされ、その内容の事實性は評價されてきてはいない (Cf. von Rohr-Sauer 1939)。ただ、マシュハド寫本発見まで存在が知られていなかった第二書簡に比して、第一書簡の内容は、カズウィーニーよりやや年長の Yāqūt al-Hamawī al-Rūmī の浩瀚な『地理學事典 *Mu'jam al-Buldān*』に引用されたことによって古くから知られていた。カズウィーニーは第一書簡からも第二書簡からも引用をしているが、インドにかかわる部分は全て第一書簡に據る。荒唐無稽と評される第一書簡が、廣範にこの書に引用される理由は明らかで、『諸國の遺跡』は引用であると斷ることなく『地理學事典』から多くの内容を引用、というよりは剽竊していると考えられるからである (Kowalska 1967: 46 ff., 87-88)。『諸國の遺跡』はサイムールの項で、ミスアル・ブン・ムハルヒルについて次のように述べる。

16) Champa (現ベトナム) のことか？

17) 東南アジアの Khmer を示すか？

サイムールは、ヒンドの地、スィンド地方に近いところにあるまち。人々は非常に見目麗しく美しい。というのも彼らはヒンドとテュルクの混血だからである。彼らの中にはムスリムもキリスト教徒もユダヤ教徒もゾロアスター教徒もいる。テュルクの商品が底に向けて送られる。サイムールのウッドはそこにちなむ。そこには Bayt al-Şaymūr がある。それは峠の上におかれた神像で、人々は大いに尊崇している。そこには管理人達がいる。中にはトルコ石やルビーで飾られたいくつかの偶像が置かれている。まちにはモスク、教會、シナゴーク、拜火殿がある。同地の異教徒達は動物を殺さず、肉も魚も卵も食べない。そこには、自然に死んだのではない、不幸なものたちを食べる者がいる。これら全ては、‘Ajā’yib al-Buldān の著者 Mis‘al b. Muhallil が傳えている。彼は諸地方を旅した者で、それぞれの場所の様々な驚異を知らせてくれる。(Āthār al-Bilād: 97)

そうして、スィンド、クーラム、カシミール、カルフ、ムルターンといった都市についても、ミスアルに言及しながら語るのである。

3. 『諸國の遺跡』の情報源

上に述べたように、『諸國の遺跡』は『地理學事典』から多くを「剽竊」しているが、他にも言及される資料は多い (Kowalskaya 1967)。インドに關する記述だけでも、イブン・ホルダーズビフやイブン・ハウカル, Mas‘ūdī といった古典アラビア語地理書の代表的作家の名前が引かれるし、何よりも興味深いのは『珍奇の贈り物 *Tuḥfat al-Gharā’ib*』という名前の書物がよく引かれている点である。同名のテキストは Jalāl Matīnī によって校訂出版されているが、寫本には著者の名前は明記されていない。マティーニーは同書が Muḥammad b. Ayyūb al-Hāsib al-Ṭabarī al-Āmulī によって 461-485/1069-1092 年に執筆されたものと考えており (*Tuḥfat*: 40-44), そうであるならトゥースィーの『被造物の驚異』や、アラビア語で同様の書物を書いた Gharnāṭī¹⁸⁾ にも先行する作品と言うことになる。『諸國の遺跡』の中で『珍奇の贈り物』がインドに關連して言及されるのは ARAM という都市と, KLBA という都市に關する記述であるが、その兩箇所において、マティーニー校訂の『珍奇の贈り物』に見える文章がほぼまるごと引き寫されている (cf. *Āthār al-Bilād*: 77, 105; *Tuḥfat*: 232-33)。さらに『珍奇の贈り物』は、都市の記述だけでなく、山や湖、泉といった、インドの自然環境の驚異に關する記述においても引用されており (*Āthār al-Bilād*: 129-30), 同書が『諸國の遺跡』の重要な情報源であったのは間違い

18) 同書については龜谷 2015 を参照。

ない。

もう一つ興味深いのは、實は前節にあるような『諸國の遺跡』に言及されるインドの都市は、トゥースイーの『被造物の驚異』に挙げられているインドの都市名とかなりの部分、重なっているという点である。この二つの点を勘案すると、『諸國の遺跡』は、9-10 世紀の古典アラビア語地理書だけでなく、11-13 世紀のペルシア語驚異譚文學をも参照しつつ編まれた作品であることがわかる。

V

以上見てきたように、11 世紀から 13 世紀にかけて執筆された驚異譚文學は、古典的地理書の形態を受け継ぐ地誌の記述と、不思議の物語、驚異譚の両方を含んでおり、インドはそのどちらにも現れる。たとえば『被造物の驚異』では、インドの都市クーラムについて

「クーラム (Kūlam) はヒンドゥスターンにある町で、チーク材、竹、サンダラック樹脂の産地である。チークは大きな木で、ヒンドの人々はその葉からシャツやズボンを作る」(守川他 2009-18: v, 456)

と、具体的な情報を伴う地誌が記される一方で、インドの不思議な像の話として

「ヒンドゥスターンに山があり、山上には 2 頭のライオンの像がある。[かつて] 雙方の口から水が流れ出していた。そこには 2 つの町があり、その水によって両者とも繁榮していた。やがて [2 つの町の間に] 敵對心が生じ、ライオンの口は壊され、水が出なくなってしまった。その口を黄金で直したが、水は出なかった。これらの町は荒れ果てたままである。」(守川他 2009-18: vii, 509)

などという記述も見える。前述のようにインドの都市の記述やバーミヤーン佛教遺跡に關する描寫が明らかに 12-13 世紀に登場する新しい情報であることを勘案するなら、本稿で取り上げている驚異譚文學には、具体的な歴史事實に基づく地誌の情報と、時間も場所も特定されない不思議話、驚異譚という、ある意味で全く性格の異なる要素が併存していると言える。冒頭に述べたディコスモの議論に引きつけるなら、インドの地誌に關する部分と、驚異の場としてのインドに關する部分とを、それぞれ「歴史的出來事としてのインド」と「イメージ、心象としてのインド」と呼び變えてみることができるであろうし、それはインドとイランの間のフロンティアが持った多義性を明確に示すものでもある。

では、『インドの驚異譚』が編まれた 10 世紀に遡るような、不思議の地インドとしての認識はなぜその後も、とくにムスリムのインド進出が活發化した後も、イラン以西で

著された書物においてずっと生き延びたのであろうか。そこにはいくつかの理由が想定されうだろう。一つは、この手の不思議話、驚異譚がそもそも文藝サロンにおける語り物として發達し、その性格を維持し續けたのではないか、という点である。アブー・ドゥラフはサーヒブ・ブン・アッパードの文藝サロンにおいて様々な物語を語り聞かせており、彼の第一書簡や第二書簡はそのネタ元か、それをまとめたものと考えられている¹⁹⁾。『インドの驚異譚』も、船乗り達の経験から来る驚異譚、不思議話の集成であり、ある種の語り物の性格をも有している。このような性質の書物においては、語られる出来事は、ある種の超越時制を持っていて、場所もぼんやりと示される方がそれらしいと言えよう。話を聞いた聞き手は、自らの持つインドや中國のイメージを重ねながら物語を鑑賞したのであり、あまりに詳細で特定の情報はそのような吟味の妨げになり得る。上で見たように、『被造物の驚異』がインド南部マラバール海岸のクーラムのまちについて、具體的で現實的な情報を記す一方で、口から水が流れ出るライオンの像の話については、ヒンドゥスターンの山としか情報を記していないのはその一例となろう。

もう一つの背景は、これらの書物がやはり知識と教養を持つ文人達によって編まれているという点である。本稿で言及した作者達の多くは自ら旅を行った者ではなく、様々な書物を學び、そこから得られた知識を集成している (cf. 守川 2015)。たとえば『諸國の遺跡』の情報元となったヤーカートの『地理學辭典』は、著者自身の旅行経験と膨大な量の参考文献の組み合わせで成り立っているが、F.J. Heer によれば、地理書の中で頻繁に言及される資料はやはり 9-10 世紀のものが中心となっている (Heer 1898: 18-22)²⁰⁾。そうして『諸國の遺跡』は實はこのあまりに大部で詳細かつ精密な『地理學事典』の節略版として、より廣い讀者層に讀まれたのであった (Kowalska 1967: 87-88)。その結果、同書のうちに含まれる、現實のインドとイメージとしてのインドの混在という状況も、そのままある程度固定化したのではなかろうか。

以上概観したように、イスラーム時代に書かれたアラビア語地理書、ペルシア語驚異譚文學において、インドの表象は、イスラーム世界の東方への擴大とともに徐々にリアルな物となっていったという單線的な發展の途を辿ったわけではなかった。歴史的出来

19) この点については、Luke Treadwell 教授による、アブー・ドゥラフの旅行記とマシュハド寫本の性格に関する未公刊の研究において示唆されている。貴重な原稿を見せてくださったトレッドウェル教授の厚意に謝意を表する。

20) 古典の記述をそのまま紹介するというこのような傾向は、たとえば辭書においても見られ、ムガル朝時代にインドで書かれた辭書ではバーミヤーン大佛について、10 世紀の地理書の記述をそのまま引用して説明している。cf. Inaba 2019

事としてのフロンティアが北インドを横断してずっと東に進んだ後も、イメージとしてのインド、文明のフロンティアの向こう側としてのインドは、一定の実体を有してムスリム作家、とくにイラン高原以西で著述した人々の心の中にあり続けた。このことは当然ながら、イスラーム世界のフロンティアが全体としてどのように認識され、かつ變化したのかという問いに深く関わる。換言するなら、実体としてのフロンティアとイメージとしてのフロンティアの間の齟齬は常に存在し続けたわけで、その齟齬、ずれが、それぞれの時代においてどのような意味を持ったのかが問題となるのである。しかしそれについてはまた稿を改めて論じたい。

(本稿は科学研究費補助金基盤研究 (c)「フロンティアとしてみた歴史的アフガニスタンの研究」(代表者：稲葉穰/2015～18年度) による成果の一部である)

参 考 文 献

- Adelman, Jeremy & Stephen Aron, (1999) "From Borderlands to Borders: Empires, Nation-States, and the Peoples in Between in North American History," *The American Historical Review* 104-3, pp. 814-84.
- '*Ajā'ib al-Dunyā* : anonym., '*Аджә'иб ад-Дунйә (чудеса мира)*, Л. П. Смирнова (ред.), Москва : Наука, 1993.
- Āthār al-Bilād* : Zakaryā Qazwīnī, *Āthār al-Bilād wa Akhbār al-'Ibād*, Beirut : Dār Ṣādir, 1960.
- Bagnera, Alessandras (2015), *The Ghaznavid Mosque and the Islamic Settlement at Mt. Raja Gira, Udegram (Swat, Pakistan)*, Lahore : Sang-e Meel Publications.
- Bīrūnī : Abū al-Rayḥān Muḥammad b. Aḥmad al-Bīrūnī, *Taḥqīq mā' lil-Hind*, Beirut, 1983.
- Bosworth, Cliford E. (1976) *The Medieval Islamic Underworld : The Banū Sāsān in Arabic Society and Literature*, 2 vols., Leiden : Brill.
- Bosworth, Cliford E. (1977) *The Later Ghaznavids*, Edinburgh : Edinburgh University Press.
- Bosworth, Cliford E. (1987) "ĀṬĀR AL-BELĀD," *Encyclopaedia Iranica*, vol. 2, fasc. 8, pp. 909-911.
- ダグラス, メアリー (2009)『汚穢と禁忌』(ちくま学藝文庫) 筑摩書房.
- Di Cosmo, Nicola, (2004) *Ancient China and Its Enemies : The Rise of Nomadic Power in East Asian History*, Cambridge : Cambridge University Press.
- Di Cosmo, Nicola (2018) "China-Steppe Relations in Historical Perspective," in : J. Bemmman & M. Schmauder (eds.), *Complexity of Interaction along the Eurasian Steppe Zone in the First Millennium CE*, Bonn : University of Bonn, pp. 49-72.
- Febvre, Lucien P. V., (1973) *A New Kind of History : from the writings of Febvre*, P. Burke (ed.), K. Folca (tr.), Lndon : Routedledge & Keban Paul.
- Heer, F. Justus (1898) *Jāqūt's Geographischem Wörterbuch*, Strassburg : Karl J. Terübner.
- Hudūd* : anonym., *Hudūd al-'Ālam*, M. Sūtūda (ed.), Tehran : Intishārāt-e Dānishgāh-e Tehrān, 1962.
- Ibn Ḥawqal : Abū al-Qāsim b. Ḥawqal al-Naṣībī, *Kitāb Ṣūrat al-Ard*, J. H. Kramers (ed.) Leiden :

- Brill, 1967.
- Ibn Khurdādhbih : Abū al-Qāsim ‘Ubaydullāh b. Khurdādhbih, *Kitāb al-Masālik wa al-Mamālik*, M. J. de Goeje (ed.), Leiden : Brill, 1967.
- 稲葉穰 (1994) 「ガズナ朝の「王都」ガズナについて」『東方學報』京都 66, pp. 200-252.
- 稲葉穰 (2000) 「イスラーム教徒のインド進出」山崎元一編『岩波講座世界歴史 6 南アジア世界・東南アジア世界の形成と展開』岩波書店, pp. 157-180.
- 稲葉穰 (2007) 「ムスリム諸勢力の南アジア進出」小谷汪之編『南アジア史 2』(世界史大系), 山川出版社, pp. 63-89.
- 稲葉穰 (2013) 「8-10 世紀ヒンドークシュ山脈の南北」『西南アジア研究』79, pp. 1-27.
- Inaba, Minoru (2019) “The Narratives on the Bāmiyān Buddhist Remains in the Islamic Period,” in : B. Auer & I. Strauch (eds.), *Encountering Buddhism and Islam in Premodern Central and South Asia*, Berlin : De Gruyter, pp. 75-96.
- 稲葉穰 (2019) 「イスラームとインドのフロンティア」千葉敏之編『歴史の轉換期 4 1187 年』山川出版社.
- Iṣṭakhri : Abū Iṣḥāq Ibrāhīm b. Muḥammad al-Fārsi al-Iṣṭakhri, *al-Masālik wa al-Mamālik*, M. J. de Goeje (ed.), Leiden : Brill, 1967.
- 龜谷學 (2015) 「中世イスラーム世界の旅行記と驚異譚」山中由里子編『〈驚異〉の文化史』名古屋大學出版會, pp. 58-75.
- Kowalska, Maria (1967) “The Sources of al-Qazwīnī’s *Āthār al-Bilād*,” *Folia Orientalia*, 8, pp. 41-88.
- Kristof, Ladis K. D. (1959) “The Nature of Frontiers and Boundaries,” *Annals of the Association of American Geographers*, 49-3, pp. 269-282.
- 桑山正進 (譯注) (1987) 『大唐西域記』中央公論社.
- Lattimore, Owen (1962) *Studies in Frontier History : Collected Papers 1928-1958*, London : Oxford University Press.
- Maqbul Ahmad, Sayyid (1963) “Djughrāfiyā,” *Encyclopaedia of Islam, New edition*, vol. 2, pp. 575-587.
- Minorsky, Vladimir (1955) *Abū-Dulaf Mis‘ar ibn Muḥalhil’s Travels in Iran (circa A. D. 950)*, Cairo : Cairo University Press.
- Minorsky, Vladimir (1970) *Hudūd al-‘Ālam : “The Regions of the World”*, 2nd ed. C. E. Bosworth, Cambridge : Cambridge University Press.
- Miquel, André (1988) *La Géographie humaine du monde musulan jusqu’au milieu du 11e siècle : les travaux et les jours*, Paris : École des hautes études en sciences sociales.
- 守川知子・他 (2009-18) 「ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースィー著『被造物の驚異と萬物の珍奇』」(1)～(11), 『イスラーム世界研究』2-2～11.
- 守川知子 (2015) 「天上・地上の驚異を編纂する——ペルシア語百科全書成立の一二世紀」山中由里子編『〈驚異〉の文化史』名古屋大學出版會, pp. 76-94.
- Muqaddasī : Abū ‘Abdullāh Muḥammad b. Aḥmad al-Muqaddasī, *Aḥsan al-taqāsīm fī Ma‘rifat al-aqālīm*, M. J. de Goeje (ed.), Leiden : Brill, 1967.
- Najīb Bakrān : Muḥammad Najīb Bakrān, *Jahān nāma*, Muḥammad Amīn Riyāḥī (ed.), Tehran : Inteshārāt-e Kitābkhāna-ye Ibn Sinā, 1963.
- 小倉智史 (2015) 「『驚異の地インド』の内在化」山中由里子編『〈驚異〉の文化史』名古屋大學出版會, pp. 398-415.

- Power, Daniel (1999) "Introduction : A. Frontiers : Terms, Concepts, and the Historians of Medieval and Early Modern Europe." in D. Power and Naomi Standen (eds.), *Frontiers in Question : European Borderlands, 700-1700*, London : Macmillan Press. pp. 1-12.
- Qudāma : Qudāma b. Ja'far, *Kitāb al-Kharāj*, M. J. de Goeje (ed.), Leiden : Brill, 1967.
- Rahman, Abdur (1979) *The Last Two Dynasties of the Śāhis : An Analysis of Their History, Archaeology, Coinage, and Palaeography*, Islamabad : Centre for the Study of the Civilizations of Central Asia, Quaid-i-Azam University.
- von Rohr-Sauer, Alfred (1939) *Des Abū Dulaf Bericht über seine Reise nach Turkestān, China und Indien*, Stuttgart : W. Kohlhammer Verlag.
- Sims-Williams, Nicholas & François de Blois, (2018) *Studies in the Chronology of the Bactrian Documents from Northern Afghanistan*, Vienna : Austrian Academy of Sciences.
- Tuhfat* : Muḥammad b. Ayyūb al-Ḥāsib Ṭabarī, *Tuhfat al-Gharā'ib*, Jalāl Matīnī (ed.), Tehran : Markaz-e Pazhūhesh-e Kitābkhāna, 2012.
- Verdon, Noémie (2015) "Cartography and Cultural Encounter : Conceptualisation of al-Hind by Arabic and Persian Writers from the 9th to 11th Centuries CE," in : H. P. Ray (ed.), *Negotiating Cultural Identity : Landscapes in Early Medieval South Asian History*, New Delhi : Routledge, pp. 30-59.
- 柳生智子 (2015) 「アメリカ史における西部：フロンティア，ボーダーランドおよび西部研究の動向」『三田學會雜誌』108-2, pp. 157-184.
- 家島彦一 (譯注) (2011) 『インドの驚異譚 1』平凡社.
- 山中由里子 (2015) 「驚異考」山中由里子編『〈驚異〉の文化史』名古屋大學出版會, pp. 1-24.
- 渡邊眞治 (1975) 「ターナーとアメリカ史の見方」, 渡邊眞治・西崎京子譯『フレデリック・J・ターナー』(アメリカ古典文庫9) 研究社.
- Zadeh, Travis (2011) *Mapping Frontiers across Medieval Islam : Geography, Translation, and the 'Abbāsīd Empire*, London : I. B. Tauris.